5. 報　　告

水辺空間整備と川に係わる活動等の状況

―「人と自然にやさしい川づくり大賞」の応募作品から―

研究第1部　部　　長　白井　顕一
研究第1部　主任研究員　箕浦　宏和

1.　はじめに

（財）リバーフロント整備センターでは、親水性、景観、生態系保全等の面で川づくりとして優れたもの及び川づくりに係わる施策、活動等を表彰することにより、地域の顔となるような川づくりの推進、計画・設計技術の向上、技術者の能力向上・士気高揚、地域住民の川への理解の深まり、川づくりへの参加の促進を図るため、平成4年度に「人と自然に優しい川づくり大賞」のコンクールを実施した。

そこで、応募作品から見た水辺空間整備、川に係わる活動等の状況を概観し、これからの川づくりに関して配慮すべき事項を検討した。

2.　「人と自然にやさしい川づくり大賞」の概要

このコンクールの特徴的な事を列挙すると以下の通りである。

① あらゆる川づくりに係わる事業、活動等を対象とするが表彰は事業、施設、活動・施策、映像・出版の4部門に分けた。

② 応募資格は官・民を問わず、また、活動等の内容によっては個人、団体の別を問わない。

③ 応募作品の審査は、相対評価によるものとし、あらかじめ定めた賞の件数をなるべく下回らない様にした。

④ 応募に当たっては、北海道開発局、建設省各地方建設局、都道府県河川担当課を経由してセンターに送付されるようにした。これは、応募作品の現地における状況を的確に把握する必要があるとの判断による。

⑤　応募作品の要件として、事業、施設関係は治水上の影響の有無、施設等の効果の確認のため竣工後２年以上経過したものを対象とし、活動・施策については現に実施中のもの、映像・出版については２年以内に作成されたものとした。

3.　応募状況について

(1)　全応募数と部門別応募数

全応募数は 187件で、事業、施設、活動・施策、映像・出版の各部門別には、それぞれ、41，70，50，26件であった。

全応募数に占める割合は、施設が37％で最も多く、以下、活動・施策、事業、映像・出版の順であった。（表－１）

表－１　応　募　件　数

	事業	施設	小計	活動・施策	映像・出版	小計	合計
北海道ﾌﾞﾛｯｸ	8	13	21	12	6	18	39
東　　北	4	14	18	12	2	14	32
関　　東	8	9	17	7	6	13	30
北　　陸	8	6	14	2	2	4	18
中　　部	3	5	8	1	1	2	10
近　　畿	5	3	8	4	2	6	14
中　　国	1	5	6	2	2	4	10
四　　国	3	4	7	5	3	8	15
九州・沖縄	1	11	12	5	2	7	19
合　計	41	70	111	50	26	76	187

(2) ブロック別、県別応募数

全国を北海道～九州・沖縄の９ブロックに分けると、北海道ブロックが最も多く全体の21％で、以下、東北ブロック17％、関東ブロック16％、九州ブロック10％、北陸ブロック10％等となっている。北海道、東北、関東の３ブロックで54％を占めているのが目だつ点である。（表－１）

県別の応募状況を見ると、44都道府県から応募があり、全く応募の無かったのは３県だけであった。さらに、応募部門別に見ると事業、施設部門で応募が無かったのは７県、活動・施策、映像・出版部門では15県に達した状況であった。

(3) 応募作品の内容

事業、施設、活動・施策、映像・出版それぞれの部門の整備目的、活動等内容を見ると次の通りである。

① 事業、施設部門

事業、施設の整備目的で分類すると、「親水性」が最も多く 111件中72％、以下「景観」、「生態系保全」、「その他」の順でそれぞれ68％、34％、３％であった。

ここで、「その他」としてはＰＲのための広報板設置、緑化によるシンボルマーク設置等である。（表－２）

表－２　事業、施設の整備目的

内　容	件数	比率
親　水　性	80	72.1
景　　観	76	68.5
生態系保全	38	34.2
そ　の　他	3	2.7
合　計	111	100

また、整備目的の重複状況をみてみると、目的が２つのものが60％で、３つが９％、単目的が32％という状況であった。（表－３）

更にその内容を見てみると、親水性と景観に配慮したものが最も多く43％でとび抜けて多く、次が親水性のみが12％で他は10％未満であった。（表－４）

表－3　事業、施設の整備目的の数

目的の数	件数	比率
1	35	31.5
2	66	59.5
3	10	9.0
4	0	0
合計	111	100

表－4　事業、施設の整備目的の重複内容

	件　数	比　率
親水性・景観・生態系	10	9.0
親水性・景観	48	43.2
親水性・生態系	9	8.1
景観・生態系	9	8.1
親水性	13	11.7
景　観	9	8.1
生態系	10	9.1
その他	3	2.7
合　　計	111	100.0

② 活動・施策、映像・出版部門

活動・施策、映像・出版部門の内容を分類すると17種類に分類でき、清掃が最も多く２９％、以下フェスティバルの17％、魚の放流、教材・副読本の作成、川の調査・研究の各15％が目立つものであった。（表－５）

また、活動等の内容の重複状況を見ると、１つが62％と最も多く、以下２つ、３つ、４つとなっている。（表－６）

２つ以上重複している内容を見ると、清掃・魚の放流及び更に別の内容が加わったものが最も多く、31％、以下、清掃・フェスティバル・プラスその他、清掃・調査・研究・プラスその他、放流・植栽・プラスその他の順が主なものである。（表－７）

表－5　活動等の内容（件数重複）

内　　容	件　数	比　率	内　　容	件　数	比　率
清　掃	22	28.9	情報誌・広報誌作成	6	7.9
フェスティバル	13	17.1	音楽作成	4	5.3
魚放流	11	14.5	見学会	4	5.3
教材・副読本作成	11	14.5	石鹸作り	3	3.9
川の調査・研究	11	14.5	サミット開催	1	1.3
コンテスト	9	11.8	条例制定	1	1.3
写真・ビデオ作成	9	11.8	ホタル・魚の飼育	1	1.3
シンポジウム	8	10.5	その他	1	1.3
植　栽	6	7.9			

比率は応募件数76件に対する割合

表－6　活動等の内容の重複状況

活動等の内容	件数	割　合
内容1つ	47	61.8
内容2つ	17	22.4
内容3つ	8	10.5
内容4つ	4	5.3
合　　計	76	100.0

表－7　活動等の内容2つ以上の内訳（重複あり）

内　　容	件　数	割　合
清掃、フェスティバル、他	5	17.2
清掃、放流、他	9	31.0
清掃、調査・研究、他	3	10.4
放流、植栽、他	3	10.4
その他の組み合わせ	9	31.0
合　　計	29	100.0

4. 個別の事業、施設、活動・施策、映像・出版の内容

事業、施設の整備内容は表－8の通りである。

表8-1　親水性の内容

親水護岸	
階段護岸・階段工	35
木柵階段工	6
緩傾斜堤防・護岸	18
斜　路	2
舟着き場	3
河道内施設	
河川プール	3
飛び石工	5
高水敷施設	
せせらぎ（水路）	13
人工滝	1
人工入江	1
広場（運動広場）	9
河川公園	6
堤内・河岸施設	
散策路・遊歩道	17
緑　道	1
プロムナード	1
ジョギングコース	1
デッキ	1
ステージ	1
テラス	2
自然石ベンチ	1
花　壇	3
パーゴラ	1

表8-2　景観の内容

平面形	
湾曲平面形	2
護岸・法覆工	
緑化護岸	5
自然石護岸	26
転石護岸	1
玉石護岸	2
巨石護岸	6
木柵法覆工	1
木杭護岸	1
石組護岸	1
装飾護岸	5
石羽口工	2
柳枝工	
化粧型枠	1
モザイクパネル	2
ｲﾗｽﾄ･ﾀｲﾙ画	3
擬石ブロック	6
擬石柵工	1
鉄平石による修景	1
緑化擁壁	1
蛇篭・フトン篭	5
河道内施設	
自然石水制	2
その他	
橋梁修景	4
植　栽	18
樹木存置	3
河畔林	1
着色段階	1
景　石	1
管理施設デザイン	4
モニュメント	1
パーゴラ	1
ライトアップ	2

表8-3 生態系保全の内容

植　生	
シガラ工	1
柳枝工	3
覆土による植生回復	2
植生護岸	2
蛇篭・フトン篭	
石羽口工	
緑化護岸	
水辺の植生回復	1
空石積み	1
植石	3
動　物	
魚巣工	10
ヤマセミ保護工	1
ホタル護岸	4
木工沈床	3
魚　道	4
傾斜落差工	1
瀬、淵造成	5
捨　石	2
水　制	1
人工ワンド	1
その他	
浄化用水導入	1
水質浄化	1

親水性の内容で多いのは、階段護岸・階段工、緩傾斜堤防・護岸、せせらぎ（水路）、散策路・遊歩道であり、景観は、自然石護岸、植栽であり、生態系保全は魚巣工ブロックである。

また活動・施策、映像・出版の内容については前述の通りである。

5. 応募作品にみる特徴

これまで、応募作品の目的、内容等について述べたが、全般的な特徴を列挙すると以下の通りである。ただし当然の事ながら、応募作品そのものの当該河川での位置付けになり、全体の計画の中での位置付けがあまり明確でないので、個別の作品の特徴というより一般的な特徴である。

(1) 事業、施設について

① 現在全国で進められている多自然型川づくりの実施以前のものが応募対象となっているため、親水性、景観の観点での整備が圧倒的に多い。

② 親水性、景観のものについても、現在では良くないと評価されている例えば、護岸にイラストを画くとか、ゴテゴテとしたデザインを採用しているものがかなり多かった。

③ 特に、親水性と言えば階段護岸や階段工、景観と言えば自然石護岸とメニューが固定化しているのは気になるところである。

④ 生態系保全については、魚巣ブロック、ホタル護岸の設置が多く、これも同様なことが言える。

⑤ 一方、緩傾斜堤防、湾曲平面形、柳枝工、植栽、覆土による植生回復、植生護岸、水辺の植生回復、木工沈床、斜路工による落差工、瀬・淵の造成、人工ワンド等現在進められている人と自然にやさしい川づくりを先取りしているものも多くあった。

(2) 活動・施策、映像・出版について前述したように活動・施策、映像・出版については、清掃、魚の放流、フェスティバルを軸としてその他の活動等を実施しているのが現状であるが、多くの住民に川に目を向けてもらうことにより河川の美化、愛護の気持ちの醸成を図るという目的に向かって地

道な活動をしているのはどれも同じである。

6. 受賞作品について

受賞作品の内訳を表－9、10に示したが、個々の作品の概要、受賞理由等については、「人と自然にやさしい川づくり大賞、受賞作品集」（財）リバーフロント整備センター編集発行）に記載されているので、ここでは受賞作品全般について述べることとする。

(1) 事業、施設部門について

受賞作品に共通する事項を列挙すると以下の通りである。ただし、当然のことながら、各作品がすべて以下の事項を満足している訳ではない。

① 周辺の景観、土地利用にマッチし、周辺と一体的に設計されている。

② 親水性、景観、生態系保全等の機能をうまくマッチさせている。

③ ゴタゴタしていなくて、すっきり悠々としたデザインである。

④ 河川護岸の固さを和らげた設計である。

⑤ 河川とのふれあいを取り戻した。

⑥ 先進的な試みである。

(2) 活動・施策、映像・出版部門について

① 幅広く、永続的な活動である。

② 住民の自発的な活動である。

③ 地域に大きな貢献をしている。

④ ねばり強い活動である。地味ではあるが着実である。

⑤ 活動内容が豊富である。

⑥ ユニークな活動である。

表－9　部門別受賞数

部門（合計件数）	賞の種類	件数
事業 (6)	大賞・建設大臣賞	1
	大賞	1
	優秀賞	1
	奨励賞	3
施設 (6)	大賞	2
	優秀賞	3
	奨励賞	1
活動・施策 (9)	大賞	2
	優秀賞	5
	奨励賞	2
映像・出版 (3)	大賞・建設大臣賞	1
	優秀賞	1
	奨励賞	1
合計 (24)	大賞・建設大臣賞	2
	大賞	5
	優秀賞	10
	奨励賞	7

※活動・施策部門の大賞1件は、施設部門と合わせて大賞としており、件数は合わせて1件で施設部門に計上している。

表−10　受　賞　作　品　一　覧

〔事業の部〕

賞の内容	応募事業名	受賞者
大賞・建設大臣賞	信濃川やすらぎ堤	建設省信濃川下流工事事務所
大賞	内別川改修工事	北海道札幌土木現業所
優秀賞	大源太川流路工	建設省湯沢砂防工事事務所
奨励賞	梅田川改修事業	横浜市
	農具川河川改修事業	長野県大町建設事務所
	阿多古かわ・くんま水車の里	静岡県天竜土木事務所

〔施設の部〕

賞の内容	応募施設名	受賞者
大賞	小貝川緑の緩傾斜堤 小貝川フラワーカナル	建設省下館工事事務所 藤代町まちづくり協議会 〔活動部門と合わせ受賞〕
	野洲川河川公園	滋賀県
優秀賞	早田川コミュニティー水路	岐阜市 ㈱アーバンデザイン・コンサルタント
	大淀川市民緑地	宮崎市
	荒川遊園スーパー堤防	東京都荒川区土木部事業課 八千代エンジニアリング㈱
奨励賞（成熟賞）	肱川大洲多自然型護岸	建設省大洲工事事務所

〔活動の部〕

賞の内容	応募活動名	受賞者
大賞	合唱組曲「阿賀野川」制作及び合唱活動	三川村教育委員会
	雨森区鯉と水車と花の小川づくり	高月町雨森区
優秀賞	最上川開放講座「川はともだち」	建設省新庄工事事務所
	西宮市内河川ウォッチング、水辺の自然	西宮市環境保全課
	新川よみがえれふるさとの川	内郷地区明るく住みよい町づくり振興会
	佐保川清掃	佐保川清掃対策委員会
	天願川に清流を！	具志川市婦人連合会
奨励賞	土器川ロマンの会	土器川ロマンの会
	新町川ラブリバーフェスティバル	新町川ラブリバーフェスティバル実行委員会

〔映像・出版の部〕

賞の内容	応募映像・出版名	受賞者
大賞・建設大臣賞	手賀沼・江戸川・利根川水三部作出版	流山市立博物館友の会
優秀賞	姫川流域治水事業概要書副読本の作成	建設省松本砂防工事事務所
奨励賞	花川「ふるさとの川」ビデオ	浜松市立和地公民館

7. おわりに

今回のコンクールは既述したように応募作品の相対評価により、受賞作品を決めたものであるが、結果的にはかなりレベルの高いものが選ばれたと考えている。もちろん、受賞作品各々が課題を全く持っていないという訳にはいかないが、それを勘案しても受賞の価値のあるものであった。

この種のコンクールは、当該箇所の位置付けなり、計画の位置付けが、川全体、地域全体の中でどのようになっているかが必ずしもはっきりとしない、川は時を経ることに姿を変える等のためなかなか難しい事であると実感させられたが、それでも受賞作品は今後の川づくり、川に係る活動等のあり方を示唆していると思う。

今後ともこのようなコンクールを実施することにより、当初意図した目的が達成されることが望まれる。